

ケンジとミチコの歴史人名談義 - - 救済王ミリンダ

中村雅之

1. 『ミリンダ王の問い』

「メナンドロスがどうしてミリンダになるの？」とミチコが突然つぶやいた。

隣に座っていたケンジは「え？」と顔を向ける。見ると、ミチコは『ミリンダ王の問い』を読んでいる。そういえば、先週、ヨシタケ先生が授業の後で、「仏教への入門として『般若心経』などを読んではいけない。難解すぎて嫌いになる。それよりも平凡社・東洋文庫の『ミリンダ王の問い』を読みなさい。ギリシア人とインド人の論争という形式だから、他の書よりはよほど読みやすい」と言っていたことをケンジは思い出した。

「ねえ、メナンドロスというギリシア人の王名がパーリ語だとどうしてミリンダになるわけ？」と今度はケンジの目を見てハッキリとミチコは言った。紀元前2世紀頃に西北インドを支配したギリシア人の王メナンドロスは、インド人の仏僧ナーガセーナに次々と哲学的な質問をあげたが、そのいずれにも明快な返答を得て、ついに仏教に皈依したという。その逸話を伝える書がパーリ語で書かれた『Milindapañhā (ミリンダ王の問い)』だが、王の名がギリシア語の「メナンドロス」とパーリ語の「ミリンダ」では少し開きがある。ミチコはそれを問題にしているらしい。

「確か、巻末に中村元という大先生の解説が載ってたはずだけど。そこに説明はなかったかい？」

「ちょっと待って。……あ、あるわ。Rhys Davids という人の説を挙げているわね。こういう風を書いてある。

インドでは個人の名が、サンスクリット語では *indra*、パーリ語では *inda* で終わる例が相当に多い。それは「帝王」「力ある者」の意味である。故に国王であった Menandros の語尾を *inda* と書きあらわしたことは、ごく自然のなりゆきである。またパーリ語では *l* が *n* に変わり、また *n* が *l* に変わる例が若干存する。また *e* は *i* に変わったのであろう。

前半はなるほどという感じだけど、後半は何だか投げやりな説明ね」

「でも、説明を試みている点は評価できる。辞書なんかだと、ミリンダは単にメナンドロスの転訛だとされることが多いからね」

「要するに、Menandros → Meninda > Melinda > Milinda ということかしら？」

「いや、事はそう単純ではない」

2. 『那先比丘経』

「パーリ語の『Milindapañhā (ミリンダ王の問い)』に対応する漢訳仏典として『那先比丘経』というのが残っているのだけれど、そこではメナンドロス王は「弥蘭」という名で記されている。つまり、Melinda/Milinda よりも前に Melanda/Milanda という段階があったと想定しないと、漢訳名の説明が付かない。ここでは「-da」の部分は省略されているけど、「弥蘭」はどう見ても「melan-/milan-」の音訳だろうからね。ちなみに「弥」はサンスクリットやプラークリットの「me」「mi」双方に対応する音訳だ」

ケンジの説明を聞いて、ミチコは頭をかしげた。

「でも、そうすると、『那先比丘経』は現存するパーリ語テキストからの翻訳ではないことになるわね。Milinda から弥蘭になるはずがないから」

「その通りだ。漢訳原典がパーリ語でないことは中村元先生の解説にも書いてあったと思うよ」

「少しじっくりと解説を読んでみるわ」

3. その他の漢訳

翌日、ケンジが学生室でうたた寝をしていると、ミチコが肩をたたいて、朗らかに言った。

「あなたの出番よ」

「……何が？」とケンジは寝ぼけまなこで答えた。

「もう、いやになっちゃうの。『那先比丘経』以外にもメナンドロスに言及している漢訳仏典があって、その漢字音訳がバラバラなのよ」

「具体的には？」

「『アビダルマ・コーシャ』の漢訳である『俱舍論』では、真諦訳が「旻隣陀」、玄奘訳が「畢隣陀」、そして『雑宝蔵経』では「難陀」になっているの」

「つまり、メナンドロス王を指す漢訳名として、弥蘭、旻隣陀/畢隣陀、難陀、の三種類があるということだね。はパーリ語の Milinda と同じ音形を表しているって見ていいだろうね。は Menanda/Menandra の Me-を省略した音訳のように見える。それぞれの漢訳と原典のおよその年代を整理してくれないか」

「まず、メナンドロス王は前2世紀の人と考えられている。そしてメナンドロス王と仏僧ナーガセーナの対論が文字にまとめられたのが、中村元先生によれば前1世紀頃のこと。パーリ語ヴァージョンはおそくとも後1世紀にはできていた。もともとの原典について、中村元先生は混淆サンスクリットで書かれたと想像しているけど、決定打はないみたい。パーリ語で Sāgala と記される都市名を、『那先比丘経』では「沙竭」あるいは「舎竭」と記すから、漢訳の原典は ś 音を持っていた言語ということで、

パーリ語は排除される。漢訳の年代は次のとおりね。

那先比丘経 - - 3世紀以前に成立

俱舍論 - - 原典『アビダルマ・コーシャ』が4世紀。真諦訳が6世紀、玄奘訳が7世紀。

雑宝蔵経 - - 472年訳

以上がおおよその年代ということになるわ」

「つまり、5世紀以前には、メナンドロス王と仏僧ナーガセーナの逸話は、インドにおいて数種類の言語で伝わっていて、それぞれを(あるものは一部分のみを)漢訳した資料が残っているというわけだ。の原典がサンスクリットであることはよく知られているから、サンスクリットでも Milinda と記したヴァージョンがあったことになるけど、あるいは『アビダルマ・コーシャ』編纂の際にパーリ語ヴァージョンから引用したという可能性も考えられるね。はもっとも古い音形を伝えていると考えてよさそうだ。Menandra あるいは Menanda の第一音節を省略して「難陀」となっている。ここまでをまとめると、メナンドロスのインドにおける呼称は、おおむね次のように変容したと言えそうだ。

Menandra 難陀 > Melanda 弥蘭 > Milinda 旻隣陀 / 畢隣陀

出発形の Menandra は、個人的にはサンスクリットや混淆サンスクリットでなく、西北インドのプラークリット (= ガンダーラ語) である可能性が高いと思う」

4. 貨幣

「そのガンダーラ語説には何か根拠があるの？」

「うん、まあ根拠というほど確固たるものではないけれど、メナンドロスの発行した貨幣が残っている。これによって西北インドの人たちが彼をどう呼んでいたかが分かるのさ。今朝ヨシタケ先生からその貨幣を借りてきたんだ」



「あら、二種類の文字があるわ。左がギリシア語で、右がカローシュティー文字ね」

「そう。カローシュティー文字による西北プラークリットすなわちガンダーラ語だ」

「何て書いてあるの？」

「ギリシア語は、9時の位置から時計回りで3時の位置に向かって、ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΣΩΤΗΡΟΣ (救済者たる王の)、下部に8時の位置から反時計回りで4時の位置に向かって、ΜΕΝΑΝΔΡΟΥ (メナンドロスの)とある。つまり、王にして救済者たるメナンドロスの[貨幣]ということだ。右のカローシュティー文字は、3時の位置から反時計回りで9時の位置に向かって、maharajasa tratarasa (救済者たる大王の)、5時の位置から時計回りで7時の位置に向かって、menamdrasa (メナンドラの)とある。内容はギリシア語と同じだ。いずれも全て属格形で記されている。なお、メナンドロスのガンダーラ語形は、na の下に鼻音をあらわす記号(アヌスヴァーラ、ここでは便宜上 m とした)が見えるものと見えないものとある。上の貨幣では明瞭には見えない。この種の貨幣から、同時代のインド人たちが王を menamdra [= menandra] (sa は属格語尾)と呼んでいたことがわかる。つまり出発形は Menandra だと考えていい。もしもこのガンダーラの地で、メナンドロス王とナーガセーナの逸話が最初に書かれたとすれば、それはカローシュティー文字によるガンダーラ語であった可能性が高いと僕は思う」

「つまり、ケンジ大先生の説だと、はじめガンダーラ語で書かれた逸話が、徐々に増補されつつサンスクリットや混淆サンスクリットそしてパーリ語などに訳され、それらの各段階で漢訳されて、さまざまな音訳が存在しているということね」

「そういうことだ。少なくともそう考える方がロマンがある」

「そのうち、ガンダーラ語バージョンの Menamdra-panha (?)が発見されるかもね」

二人はメナンドロスの貨幣を眺めながら、しばし、遠いガンダーラの地で繰り広げられたであろうギリシア人の王とインド人の仏僧との対論に思いを馳せたのだった。